

直江津物語絵本

なおくんと^{こた}居多にゃんの
ふしぎな夏まつり

文・直江津地区青年有志の会 画・ひぐちキミヨ



夜の荒川
よる あらかわ

神輿が下る
みこし くだ

川は万燈の迎え船
かわ まんとう むか ぶね

祇園囃子の笛や太鼓で
ぎおん ばやし ふえ たいこ

夜が明ける
よ あ



しちがつにじゅうろくにち
七月二十六日、今日から直江津祇園祭。

なおくんは、おじいちゃんと一緒に

お神輿を見に来ました。

あらかわばし
荒川橋の周りにはたくさんの屋台が並び、

ふえ
笛や太鼓でにぎわっています。

なおくんはおじいちゃんに聞いてみました。

「おじいちゃん、お神輿はどこからくるの？」

「おまん、そんなんも知らんのかね。」

たかだ
高田の稲田から川を下ってくんだけだね。

だすけ、お神輿に乗った神さんをお迎え

するために、屋台が集まるんだねっか。」

おじいちゃんは、直江津のことなら

なん
何でも知っている直江津博士です。



「お店も人もいっぱいだね。」

なおくんも、お祭りの日を楽しみにしていました。

「あっ！ぽっぽ焼き！買ってもいい？」

なおくんは、ぽっぽ焼きが大好きです。

「じゃあ買ってきない。うち持ってって、みんなで

食べればいいわ。」

「うん！買ってくる！」

なおくんは、お店に向かって走り出しました。

「すみません。十本ください。」

「はい、五百円ね。」

なおくんは財布からお金を取り出しました。

そのとき！



なおくんのもっていたお金がチャリーン！と落ちて
コロコロ…

「あっ！まってー！」

なおくんは必死で追いかけます。

人ごみをかきわけてようやくお金を見つけました。

「あれ？」

ふと気がつくともどりが明るくなっています。

いつの間にか知らないところへ来てしまったようです。

なおくんは急に不安になってきました。

「おじいちゃん！おじいちゃん！」

呼んでも声はありません。

するとそのとき、どこからか声がありました。

「おや？そこにいるのは誰かにや？」



声こえに気き付ついたなおくん。

あたりを見み回まわすと、そこには、一匹いっぴきの猫ねこがいました。

「ここは由緒ゆいしょ正ただしき五智ごち国こく分ぶん寺じ。そこでにやにしているんだ？」

「うわあ〜!? 猫ねこがしゃべった!」

「私わたしの名な前は居多なまえにやん。直江津なおえつの居多こたヶ浜がはまから

来きたんだにやん。

君きみはいったいどこから来きたんだにや？」

なおくんはこれまでのことを居多こたにやんに話はなしました。

「にやるほど。どうやらなおくんは違ちがう世界せかいへ

来きてしまったようだにや。」

「ええー!? どうしよう…。」

「どうやったら元もとの世界せかいに戻もどれるの？」





「困こまったときの神頼かみだのみだにや。

八坂神社やさかじんじやの神様かみさまに相談そうだんしてみるにや。

それでは行くいにやー!

居多こたにやんがそう言いうと、

体からだがふわりと浮うきました。

「うわあ! すごうい!

八坂神社やさかじんじやまでひとつとびにやー!

八坂神社やさかじんじやに着いたなおくと居多こたにゃんは、
境内けいだいへと向むかいました。

「ここで、二礼にれい、二拍手にはくしゅ、一礼いちれいをするにゃ。」

「ニレイ…ニハク…??」

「二回にかいお辞儀おじぎをして、二回にかい拍手はくしゅ、最後さいごにもう一回いっかい

お辞儀おじぎをするにゃ。」

※さあ、君きみも一緒いっしょにやってみよう

れい、れい

パン、パン

れい

すると…

ぼわわわーんっ！



真まっ白しろな煙けむりとともに、神かみ様さまがあらわれました。

「わしは、八坂やさか神社じんじやに住すむ神かみ『スサノオ』。わしになんのようかな？」

「じ、実は…」

なおくんはこれまでのことを話はなしました。

「なるほど、元もとの世界せかいに戻もどりたいんだな。

よし、わしが戻もどしてやろう。」

「本当ほんとう!? 良よかった!」

「しかし! ただで戻もどしてやるのでは面白おもしろくない。

ここはひとつ、わしと勝負しょうぶをしよう。

わしの出だす四よっつの直江津なおえつクイズに答こたえられたら、元もとの世界せかいに戻もどしてやろう。

ただし、制限時間せいげんじかんは日ひが沈しずむまでだ!」



福永
十三郎

?



「では一問目じゃ！福永十三郎とは何をした人物か、答えてみよ。」
「福永…十三郎…うん。だれだろう…。」

なおくんは頭を抱えてしまいました。

「なおくん。がんばるにや！直江津クイズだから、
きっとこの町のどこかにヒントがあるはずにや。」

「ん？そういえば『福永町』っていう町内があったな…。」

「そこに何かヒントがあるかも知れないにや。
よし！行ってみるにや！」

なおくんと居多にゃんは走り出しました。

福永町ふくながちょうについたなおくんはあたりを見回みまわしました。

「あっ！あそこに福永神社ふくながじんじやがある。

もしかしたらヒントがあるかもしれない！」

「ここに石碑せきひがあるよ！何なんて書いてあるんだらう。」

「やったにや！福永十三郎ふくながじゅうざんろうのことが書いてあるにや。」



「よし！答えが分かったぞ！」

なおくんと居多にゃんは急いで八坂神社へ戻りました。

「さあ答えは何かな。」

スサノオは継続団子を食べながらニヤニヤと

笑みを浮かべています。

「福永十三郎は直江津でも魚を自由に売れるように
頑張ってくれた人です！」

「ほほう。なるほど…。…正解だ！」

昔は直江津で獲れた魚でも自由には売れなかったからな。」

「やったー！」

なおくんと居多にゃんはハイタッチして喜びました。





「それでは第二問！昔の直江津駅の、
最大の特徴といえは何だ！」

「うんなんだろう？」

よし！直江津駅に行ってみよう。」

なおくと居多にゃんは直江津駅に
行ってみました。

「今の直江津駅はなんだか船みたいな形をしてるね。」

「そうだにや。今の直江津駅は、」

『飛鳥』っていう船をまねてつくられたそうだにや。」

「そういえばなおくんもおじいちゃんからそんなことを聞いたことがあります。」

「うん。どこかにヒントはないかな…。」

「なおくん。図書館に行けば答えがあるかもしれないよ。」

「そっか。近くにあるね。行ってみよう！」

二人は急いで図書館へ向かいました。





はい
入ってみると、そこには昔の直江津駅の模型が
置いてありました。

「あつた！これが昔の直江津駅だ！」

「へえ、こんな形してたんだ。」

あお さんかくやね えき はじ み
こんな青い三角屋根の駅、初めて見たよ！
やまごや
山小屋みたいだ。」

答えが分かった二人は急いで八坂神社へ戻りました。

「ほほう、意外と速かったな。」

スサノオは、つかそばをすすりながらまたニヤニヤと

笑みを浮かべています。

「答えは、青い三角屋根の駅だ！」

「なるほど…正解だ！」

「わーい！」

喜んで二人をよそに、スサノオは次の問題を出しました。





「では、だいさんもん第三問。なおえつ直江津の言葉で

『せんかう』とはどういう意味いみじゃ？」

「せ、センカウ!？」

ふたり二人には何なんの事ことだかさっぱりわかりません。

「うん。いったいどこに行けばヒントがある
のかわからないよ。」

「これじゃあ元もとの世界せかいに戻もどれないにや…」

ひ日は山やまの向むこうへと傾かたむきかけています。



泣き出してしまいました。
なおくんは心細くなり、
泣き出してしまいました。

「うわーん。」

「なおくん！あきらめちゃだめにゃー！」

そのとき、神殿しんでんの戸とがガラツと開ひらき、
スサノオの奥おくさんが出てできました。

「おまん、まだそんなことやってんのかね！」

「あつ、す、すまん…。」

スサノオはしどろもどろです。

「もう日暮ひくれるねっか！せんかうでね！」

ガチャン！

神殿しんでんのカギがいきおいよくかけられました。

「あっ！わかったぞ！」

なおくんがさげびました。



「『せんかう』はカギをかけることだ！」

「うらむ：ラッキーだったな。正解だ。」

「ばんざーい！」

「あと一問で元の世界に帰れるにや！」

でも、あたりはだんだん暗くなってきました。





「では最後の問題だ！祇園祭のお神輿は川を下ってくる。では、お神輿は

どこから川を下ってくるのだ。答えてみよ！」

「うん、これも難しい問題だにや。」

「どうすればいいにや。」

もう調べに行くような時間は残っていません。

「はっはっはっ。日ごろから直江津のことを

勉強しておけばよかったな。降参かな？」

スサノオは大きな声で笑っています。

「なおくん、もう日が暮れるにや！」

居多にやんがあきらめかけた、そのとき！

「あっ！さっきおじいちゃんが教えてくれたことだ！」

なおくんの頭の中でおじいちゃんという言葉が浮かびました。

「おまん、そんなんも知らんのかね。」

高田の稲田から川を下ってくだわね。

だすけ、お神輿に乗った神さんを

お迎えするために、屋台が集まるんだねっか。」

なおくんは力強く言いました。

「高田の稲田から川を下ってくるんだ！」

「な、なにい!? 正解だ！」

いったいどこでそれを知ったのだ!?」



スサノオはおどろいてなおくんに聞きました。

「直江津博士のおじいちゃんに聞いたのさ。」

なおくんは自信満々に答えました。

「なるほど、そちらの世界にも直江津のことを

愛している人がいるのだな。それを聞いて安心した。」

「では、約束通り元の世界に戻してやろう！えい！」

スサノオが腕を振り上げると：

ひゅーー ぐるぐるぐるぐる

なおくんの体が宙に浮き、空へと吸い込まれて

いきました。

「うわー！ー！ー！」

なおくんがふと気が付くと、そこはぽっぽ焼き屋の前。

しかし、そこにはもうしゃべる猫も、神様の姿もありません。



「おーい！なおくろん！」

おじいちゃんが呼んでいます。

「あ！おじいちゃん！」

「まったくどこ行ってたんだ。探したねか。」

おじいちゃんはほっとした表情で言いました。

「さあ、もうすぐお神輿が来るぞ。行くでね。」

「はーい！」

「おじいちゃん。ぼくね、もっと直江津のことが
知りたい！」





「どうした、急に？」

「だって僕が住んでる町のこと、
もっとよく知りたいんだもん！」

「そりゃいいわ、自分が住んでる町のことを知るの
いいことだ。」

よし、おじいちゃんがいろいろ教えてやっかね。」

なおくんはおじいちゃんと手をつないで
歩きだしました。

夜の荒川
よる あらかわ

神輿が下る
みこし くだ

川は万燈の迎え船
かわ まんとうのむかぶね



祇園囃子の
ぎおん ばやし

笛や太鼓で
ふえ たいこ

夜が明ける
よ あ



こんにちは!!

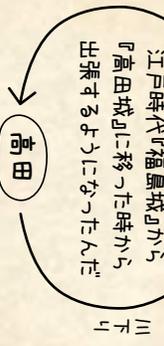
直江津祇園祭



旅するおみこし

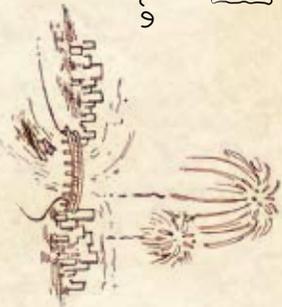
23日 祭樂祭 (はっこうさい)
直江津 (かんざよさい)
28日 環御祭 (かんざよさい)

江戸時代『福島城』から『高田城』に移った時から出張するようになったんだ



花火

花火は おみこしの お迎え



祇園祭って?

八坂神社の神様『スサノオ/ミコト』が『祇園精舎(ぎおんしょうじや)』の守り神であることから名付けられたお祭り。全国各地にあるけど、京都が本場だよ。

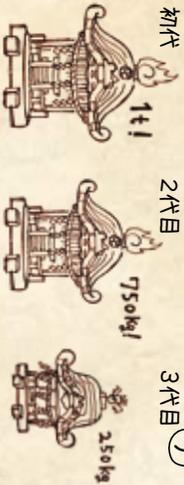
いつ頃からあるの?

直江津の祇園祭は平安時代に始まったと言われています。約130の年も前!!

若衆宿

各町内には若衆宿があって休めるようになっているよ。

おみこしお3代目!



言えるかな? 19町内

- おけいばの
- 旭区
- 荒川町
- 安国寺
- 石橋一・二丁目
- 沖見町
- 栄町
- 塩浜町
- 住吉町
- 善光寺浜
- 天王町
- 東雲町
- 浜町
- 福永町
- 本町・横町
- 港町
- 御幸町
- ノノ播
- 四ツ屋

直江津の屋台

【お囃子】町内によって違う



【舟形屋台】みんな『八坂丸』

今の形になったのは大正～昭和のはじめから。

説

『わっしょい』=『和を背負う』から『よいやさ』=『弥栄(いやさか)』から

直江津は交通の要衝

直江津の神社仏閣

港と陸路

港

762年、平安時代『水門都宇』
と言われる。廻船式目の『日本海
七濤』のひとつ。現在でも重要
港湾に指定されている。



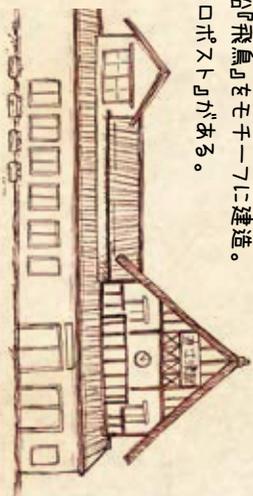
陸路

北陸から江戸に向かう重要な
視点。現在も国道8号線と18
号線、また高速道路の分岐点
としても重要路線となる。

鉄道

明治19年に開山駅 - 直江津駅間の開通と同時に開業。当時の所在地は
関川左岸(西側)、現在の直江津橋西詰付近にあった。新潟県では最も早い
開業と言われている。容姿は山小屋をモチーフに青い三角屋根の駅舎として
有名。現在の駅舎は客船『飛鳥』をモチーフに建造。
鉄道の起点である『のキロポスト』がある。

金沢・長野・
新潟のび真ん中!!



居多神社

927年より以前に造営。
越後一宮。



五智国分寺

741年頃建立。
経蔵(きやうぞう)は
上越市で最古の木造建築。
三重塔は未完成。



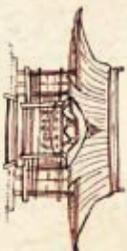
光源寺

1211年、親鸞の弟子
最信が開山。



八坂神社

江戸時代は「今町祇園社」
と呼ばれていた。
諏訪社と日吉社を合祀し、
現在の八坂神社に。



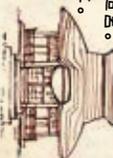
観音寺

1058~64年頃建立。
兜池(かぶていけ)には
源義経の鎧兜が
掉(た)込まれたという
伝説が!



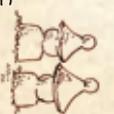
府中八幡宮

870年に造営。
越後国総社。



十念寺

別名：浜善光寺、
729~749年に
行基(ぎょうき)が開山。
石塔は鎌倉時代のもの。



他にも...

湊八幡宮 1063年~港の守護

日野宮神社 1616年~能登からの移住者により

琴平神社 1804~17年、四国の金刀比羅より分霊

日吉神社 1804年以前、砂山村の産土神

大神宮 1891年、伊勢神宮の分教所

住吉神社 1788年、大阪の住吉神社より分霊

福永神社 福永十三郎を祀る

今いよいよハナビ...

安国寺

1331年建立。越後三大刹のひとつ
と言われる。後に会津へ移った。

至徳寺

1384~87年に建立。上杉家
の菩提寺として栄える。天下十刹、
越後三大刹に数えられるほど立派
だった。



あとがき

公益社団法人上越青年会議所では、地域活性化の一環として、直江津地区の子供に向けて、将来、このまちを牽引できる大人へと成長を遂げるために、『生まれ育ったまちが好きだ！』と言える郷土愛といった地域を想う心の豊かさを養う次世代運動を展開しております。

現在、インターネットやゲームの普及により媒体を通じた無機質なコミュニケーションが生活の中心となりつつある中で、社会や他人のことは考えず、自分の利益や快樂だけを追求する利己主義や、過去や将来のことを考えないで、ただ現在の瞬間を充実させて生きれば良いとする刹那主義が蔓延しているように感じます。

私たちが何気なく住んでいる町は、昔の人たちの頑張りや思いやりといった未来を見据えた想いによって、できあがっております。今後は私たちがその想いを伝えていかなければなりません。そこで当会議所では『難しいことを分かりやすく教える教材』である絵本に着目し、大人から子供たちへ繰り返し読み聞かせることによって、この直江津への地域の人たちの想いを伝えていこうと考え、この絵本を作成しました。

この絵本では、あえて詳細なエピソードは省かせていただきました。主人公のなおくんが『自分の足で調べ』『おじいちゃんとの会話の中から知る』ことから様々な発見をしています。子供たちの、このまちの知らないことへの素朴な疑問に対して、私たち大人から答えが返ってくる。このような子供と大人が問答できることも『絵本読み聞かせ』の大きな魅力のひとつであると考えます。

このまちには先人たちの幾多の想いが込められています。今回、直江津の魅力の一部を記載させていただきましたが、このまちにはまだまだ多くの魅力があります。この絵本が子供たちの『このまちを知りたい。そしてこのまちが好き』という心の成長のきっかけとなって頂ければ幸いです。この度はご清覧頂き、誠にありがとうございました。

公益社団法人 上越青年会議所

私のまち活性化委員会

直江津物語絵本
なおくんと居多にゃんの
ふしぎな夏まつり

2016年10月●日 初版発行

文：直江津地区 青年有志の会

画：ひぐち キミヨ

企画・発行：公益社団法人上越青年会議所

私のまち活性化委員会

問い合わせ先：私のまち活性化委員会

委員長 八木 崇博

TEL：025-522-1819

E-Mail：jimukyoku@joetsujc.com

製本・印刷：サクラ印刷株式会社

直江津地区青年有志の会 参加者

加藤 啓 (安国寺)	勝島 渚 (塩浜町)
笠原 勇氣 (御幸町)	竹内 龍司 (福永町)
吉田 周志 (八幡)	斉藤 謙介 (善光寺浜)
水落 誠 (塩浜町)	丸山 岳人 (四ツ屋)